
ハイネには何が足りないのだろうか？

希恵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイネには何が足りないのだろうか？

【Nコード】

N8522S

【作者名】

希恵

【あらすじ】

主人公の中学2年生、ハイネは、感情が無いため、虐められることになった非凡な女の子。ある日、ひょんなことからハイネは少年漫画のセンターカラーにでてきそうな少年、エックスに助けられる。エックスのほうはそんなハイネのことがすきらしい。ハイネはそんなエックスが嫌いだった。

——よくわかんないけど、嫌いになった。

非凡な日常の中に小さな感情が動き出すとってものしい「かも」

小説。

ぜひ、読んでください。そうじゃないと、作家が……，

ハイネ

——重力に任せて、ただわたしはふわりふわりと浮かぶ
そんなことがあったいいなってわたしは思った。

それがあればわたしはそれで幸せなのだ。

手の平だけでも浮くだけでいい。

それだけで幸せ。

もし、それがあれば今のわたしの残酷をまとめて受け入れる。

ともおもった。

目の前に広がる残酷^{コレ}を。

受け入れることはきつとできる。

もし、あればの話……だけど。

「——眠い。」

それがわたしの今日の第一声。みたいなもの。

一応、さつき廊下で担任にばったりあって

あいさつしたばかりだけど。
まあそれはほっとく。

その前には購買のおばさんに「パンーつください」って言ったけど。
それもほっておく。

眠いっていう私の言葉は私、つまり『ハイン』としての第一声、
私自身の本音がとても含まれているのです。

それ以外の目的で言葉をつかっててもそれは私の言葉じゃなくて、
たんなる使い古された伝達。
言葉とはいえない代物。

そうわたしは思ってる。

そんなことばかり考えてるから
こんな状態になるんだってわたしはわたしを叱ってみる。

ちなみに、目の前に広がっている残酷とは何か？

—— ロッカーに閉じ込められている。

ただそれだけだ。

昼休みが終わって教室に帰ったらなぜか閉じ込められた。
しかもクラスメイト全員がわたしの腕やら足やらつかんでロッカー
に入れやがった。

まあ、うちのクラスは協力プレイがお得意なのね。

そうやってマダム風に言いたくなるような光景だった。

あ、でもわたしが手伝ってないから、

『クラスの皆で一致団結』はコンプリートできてないね。
なんたつてわたしを運ぶのにわたしは手伝えないから。

一応、私もクラスメイトです。

こんな状況の中、どうしてこんな戯言いつてられる暇があるか、教えてあげようか？

まず、ロッカーから出られない。

どうやらかれらはロッカーに何かの細工をしかけたのか
わたしが中からおしてもうんともすんとも言わない。

それでもう出る気がうせて現在に至る。

ホントどうしよう。

ろっかーから出られた。

出たと思って思っけど、出られないならしょうがないか……。
というかあれから何分たったんだろうか？

外の音を聞くとどうやら授業中らしい。

さっきから聞こえるキンキンした声は多分、数学の先生だろう。
ってことは……。

6時間目……かよ。

丸2時間閉じ込められてるんだ。私。

というか先生もそこまでくれば気づくでしょ、普通は。

生徒全員で私の搜索とかしてくれたら、あとから私が見つかった
なんか熱血ドラマの終わり方。ができるのにな^^。

まあ、ありえないけど。

——それ以上に私の想像は膨らまなかった。

想像力がすくないのかな？

もうどうでもいいって思ってるからでしょ。

自分で質問しといて、答えをあつさりと出してみる。
これは完璧にどーでもいいという思考の現われなんだろうっておもった。

ともかく、さっき言ったみたいに、
わたしは眠いんだ。

さっきからあくびが出そうになるけど、我慢する。
だけど涙だけはどうしても出てしまう。
あくびが出ると、涙がでるのってなんでなんだろうね？

人間の体のサイクル、すばらしい。

どーでもいい。眠い。

というか寝よう。

人類初のロッカーでオヤスミ。

そうおもって体を器用に動かして、まっすぐに立っている状態を体
育ずわりにする。

うーん。ロッカーって結構狭いからちょっとこれはメンドイかも。

——その時だった。

教室がざわざわしだした。

その後、ドアがきつくしまる音が聞こえた。

え、何？だれか入ってきたの？
すると、こんな言葉が聞こえた。

「——「エックス」！」

多分この声は女子のリーダー格の大泉さんだ。エックス？

だれそれ？

疑問符が私の頭の中を飛び交った。

つてあれ？

わたしは驚いた。

いつのまにか私の目の前には光が差し込む教室があった。

——ロッカーが開いた瞬間だった。

周りを見渡すと、

横に南京錠をもった少年がいた。

見たことのない顔だった。この子があけてくれたんだろうか？

というかこのロッカーは南京錠なんかで封鎖されてたんだー！。

なんで先生言わないんだよー！。と思った。

南京錠を持った少年は私にこういった

「大丈夫？ けが……はないね」

黒色の髪が少し揺れた。

これが私、ハイネとカレとの出会いだった。

誰、アンタ??

——「アンタ、誰？」

そうしか私にはいえなかった。
そういうと教室内の皆様方は
はあーなにいつてんのコイツといたいような目でじろじろと見る。
というかいえよ。コラ。

「キミ！何をしているんだ！！授業中だぞ！他のクラスの生徒はクラスに戻れ！！」

数学の先生はそうカレに行った。

あ……どうやら先生もこの人が誰か分かってないみたい。

すると、大泉さんやそのほかのクラスメイトはこう口々に言い出した。

「せんせー、エックスはこの学校の生徒じゃないですよー。」

「エックス知らないとか、先生、シンデレラちゃんと同じくらいダメですうー」

「エックスは俺らの正義の味方だよなー」「うん、エックスサイコ——！！」

「「サイコー！！」」

——「は？エックス誰だよ。」

この学校の生徒じゃない？

ってかコイツうちの学校の制服きてんじゃん。
なんで?????

意味不明??

すると、エックスらしき黒髪の少年は

「ああ、皆歓迎ありがとう！俺もうれしいよ。」
という。

「誰？」私という。

その言葉に彼は答える

「俺は、エックス。君達学生のセイギノヒーローっていうのをして
いる。」

君が苦しむを救う。それが俺の使命さ！！」

不審者は去る。

——セイギノヒーロー？

「ソレ本気でいってる？」

頭イカレてんじゃないかって思った

「ああ、本気だ」

そういつてエックスはさわやかに微笑んだ。

「僕はエックス。君達思春期真っ只中の少年少女を助けることを生業にしている。

いつだつて助けを求めている人を助ける。

残念ながら僕は生身の人間だからそんなに遠くへは迎えに行くことは出来ないけどね」

ヤバイ、本気で危ないんじゃないかこの人。

というか私は別に助けなんか求めた気はさらさらないんだけど。どうでもよかったしね。

そうおもっていったらクラスメイトの一人が私を鼻で笑ってこういつた。

「まあ、エックスの良さはハイネには分からないよね。

なりそこないのシンデレラに……………」

——シンデレラというのは私のあだ名である。

ハイン「灰子」シンデレラ

というサイクルでつけられた。

けなしている感じがあまりないあだ名ですね。

と感想をいいなくなる。

すると、エックスは

「こら、ダメじゃないか。悪口を言うのは禁止。

あと、皆もね！

クラスメイトなんだから

ちゃんと仲良くするように！

じゃなきゃこれからはだれ助けに行かないからな」

そうエックスはいった。

「ええー、イヤだー！」

「そんなこといわないでー！」

「んなこといわないでくれよエックスー」

「ちゃんとハインとも仲良くするからゆるしてくれよー」

とみんながわめく。

っていうかなにいつてんだろ。皆。

こんな人、別にいなくてもいいじゃん。

大体この人もこの人だ。仲良くするなんてことばだけじゃん。
うちのクラスの皆様は有限無実行がモットーなのに。

「よし、じゃあいい。」

またなにかあったらすぐにかかけつけるから、
じゃあね」

「またきてくださいね」

エックスのことばに大泉が答える。

げっ……大泉のがハートマークになってる。
完全にメロメロ状態だ。正直見ててきもい。

エックスは去り際、私に耳打ちした

「——また、会いに行くね」

「は？」

「じゃあ、みんなさようなら！」

「「またね、エックス!!」」

そっいつて手のふりあいをする。クラスメイトプラス謎の不審者。

何なんだコレ。

そうおもっているのはきつとこのクラスでは私と完全に放置されてしまっている先生だけだろう。

———というか、授業再開しませんか？

エックスさん、再び

次の日、教室にいとわたしの席には、昨日のエックスさんとやらがいた。

——取り巻きの大泉さんやその他の女子もいっしょに周りに配備してたけど……。

「やあ、ハイネ」
そういつて手を振るこの少年は頭に蛆虫うじむしでもわいているんじゃないでしょうか？

「あの、そこ私のせきなんでどいていただけませんか？
すわれないんですけど」
成り立たぬ会話。
お前のことばに返事はしねえ。
つて男らしく心の中で言い切ってみたりする。

「ああ、ごめんね」
そういつて返事をするエックス。

それは、
関係の成立しない会話を、
無理に、
成り立たせようとしているようにみえた。

すると、急にこんな声が……、

「——はあ？ 何、灰だらけの癖にエックスに命令してんの、クソが……っ！」

取り巻き1 がキレた。

「……」

ハイン は無視スキル発動。

「調子こいてんじゃねーよ……！」

取り巻き1は余計にキレた。
しかし……ハインにはノーダメージ。

某モンスターゲーム風にいうならこんな感じの
ミニストーリーがおこった。

……特に意味はない。

「ミサちゃん、そんなこといつちやだめだよ。
しかも、今は俺のほうが悪いんだしね？」

取り巻き1……ミサちゃん（多分）は
でも……。とか言いながらも、ごめんなさいとエックスに言った。

下らん。マジで。

そして、やっと私のせきから立ち上がるエックス。

私は座って机の中に教科書を放り込んでゆく。
ちなみに教科書に虐めの痕跡はない。

この学校の虐めは物品証拠が残るようなことはしない。
相手の体を傷つけるようなことも。

これは念のため被害者が親にチクっても面倒なことにならないように
するための保険で、

けっして虐められる方を気の毒に思っただけのことじゃない。

というかそもそもそんなことを考えるやつは虐めはしないでしょ。

おそらく……。

「へえ、こんな本読んでるんだ？」

いつの間にかエックスが私のかばんを覗き込んで、1冊の本を手
取っていた。

「ちょ……、やめてよ」

私は彼から本を乱暴にとった。

もしかしたら、今の衝撃で本に傷がついたかも。

そう思いながら私は彼のほうを向いた。

「あ、やっと、俺のほうを見てくれたね」
そういつて、エックスは笑いやがった。

——気分が悪くなった

人のかばんを勝手に覗くのは人としてのマナーとしても、常識としても、最低だと私はおもってる。
なんかむねがキリキリする。

「——安藤ハイネ」

そんな中、かれは突然私のフルネームを言った。

いきなり、何をいいだすんだろうか、このひとは。

「実はさ、きみのこと調べたんだ。ハイネのすべてをね。
もしかしたら……、

——こんなところいたらハイネの個人情報ゼーんぶバラしちゃうかも知れないなー。俺」

——ゾクッ……！！

やばい、今……なんか寒気した……。

「だからさ……」

——そして、エックスはにっこり笑って、言った。

「あつちで二人っきりで話さない？」

エックスは私の手を取り、何処かへ引つ張ってゆく。

ざわざわする教室、朝のホームルームの始まりを告げるチャイム。

私はただ彼のされるがままに教室という世界から抜けていった。

資料室。

——第2資料室。そこにあるのは大量の使われていない本と卒業生のアルバム。

使う人なんかめったにいないけど、
なくなっちゃいけないような貴重資料が
中には紛れ込んでいる……ってわけでもない。

たまに閉め忘れが発生しても気づかれないような、そんな場所。

今、現在そこにいるのは安藤ハイネと
私が知っている人間のなかで謎多き人物、エックスだった。

さつき、彼は私を脅した。

私の情報。

その中には私が他人には知られたくないものもあるかもしれない……。

私は、たずねた。

「一体、何のようですか」って。

そしたら、

「——プツ……！」

いきなり笑われた。

ちょっと、人に大してひどいでしょ、それはちょっと。

「なんなの、アンタ」

「あハハッ。ごめんごめん。冷静な顔でそんなこというから俺笑っちゃったよ。」

謝罪しながらも笑っている少年漫画のヒーローっていたらイヤだ。

目の前に似たようなのがいるけど。

すると、自称ヒーローさんはこういった。

「本当に失礼。笑うのはいけないね。」

でもさ、ハイネっていつつも無表情なんだよね。

昨日、閉じ込められてたときもあんまりオドオドしてないというか、

——『感情が無い』っていうか。

いつだって自分に起きることを他人のことにように思ってるよね。それってしんどくないかい？」

感情がない……か。

「そんなのアンタに言われる筋合いはありませんか？
というかさっきのアレは何ですか、脅し？」

「ああ、アレ？」

エックスさんはわらって言った。

「——カマかけただけだよ。」

はあ???

何それ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8522s/>

ハイネには何が足りないのだろうか？

2011年11月15日13時24分発行